

我、鉄路を拓かん 第四回

梶よう子

第四章 約二十四町

一

明治三年（二八七〇）三月十九日、政府は、鉄道敷設にあたり民部大蔵省内に鉄道掛を新設し、本格的に始動した。

測量は、六郷川（多摩川下流）を境にして、東側は鉄道の起点となる東京汐留から三月二十五日に、横浜も四月に入るとすぐさま始められた。

四月の七日、弥市と久治郎は、日本橋新葭町にある百尺楼に向かった。ここは卓袱料理が有名で、錦絵にもなった店だ。ふたりの前にも、後にも、次々人がやって来る。皆、此度の鉄道敷設に携わる請負人だ。

仲居に通されたのは襖を取り払った大広間だった。すでに数十人が席についている。用意されている膳の数だけを見ても、百はある

う。

「どこに座ったらいいものか」

弥市が迷っていると、

「おい、弥市さんじゃないか。久しぶりだな」

背後から声をかけられ振り返ると、横浜の顔役、梅田半之助が立っていた。半之助とは、かつて互いに薩州屋敷の出入りとしてやってきた間柄だ。ご一新後は、横浜で請負人として名を馳せているが、半之助が鉄道敷設にかかわることは、山中政次郎からすでに聞かされていた。が、こうして再び直に顔を合わせると、やはり懐かしさが込み上げる。

「息災そうでなによりだ。此度はよろしくお願いいたします」

弥市が頭を下げると、「よしねえ」と半之助に肩を叩かれた。

「そういう堅苦しい真似はよしてくれよ。昔馴染みなんだ。それよりなによりおれは口惜しくてならねえよ。相模屋の政次郎さんが、弥市さんを譲ってくれねえからよ。横浜の築堤を一緒に造りたかったんだがなあ」

「政次郎さんから伺いました。ありがとうございますことですが」

「いいってことよ。仕方ねえさ。芝品川の築堤のほうがはるかに長いからな。おれのほうも、品川台場を造った奴らが集まってくれりんでな。心配ねえ。お、あんたはたしか、安達屋さんだったな。指

折りの棟梁だ」

「とんでもねえことで。請負人としては小せえほうで」

と、久治郎が控えめにいった。

座敷の出入り口で立ち話をしているわずかな間にも、続々と人が集まって来る。見知った顔もいれば、そうでない者もいる。知った者同士、互いに声を掛け合い、たちまち世間話に花が咲く。座敷の中は徳川將軍家のお膝元で江戸を建て、直し、造り上げてきた面々が、明治の新時代を象徴する鉄道敷設に従事する。ともあれ、大工、左官、鳶、石工、土工請負など名うての者がこうして一堂に会するのは、なかなか壯観であり、これが国を挙げての大工事であるということをまざまざと知らしめている。

弥市はその一端を担うことに大きな責任と、誇りをあらためて感じ、胸が熱くなった。

「一同、賑やかなのはいいことだが、早いところ、落ち着いてくれねえと困るんだがな」

山中政次郎が姿を見せた。途端に座敷の中が水を打ったようになる。

「おっと、親分さんの登場だ。じゃ、またあとでな」

半之助が離れ、上座の方へと歩いていく。弥市と久治郎は中庭に面した席に腰を下ろした。

半之助と政次郎のふたりは、政府から直接仕事を請け負っている。弥市とは立場が違う。

見れば、政次郎の隣には養子の重太郎が座っている。

徳川時代もそうであったが、公儀や大名家で新たな作事、普請があれば、まず御用達ごようたしがその仕事を請け負う。そこから、左官や屋根葺き職人ら、各職人別に下請けに出し、さらに孫請けに出されていた。入札いれふたも時にはあるが、皆で口裏を合わせて行われることがほとんどだった。

次第に、有力な大工や鳶頭とびがしら、口入れ屋くちい、あるいは子分を率いる政次郎のような侠客きやくかくなどがすべてを引き受け、差配さはいする請負業という形が作られ始めた。

江戸から東京に変わり、そして近代化を目指す明治の世は、町の整備も盛んになり、鉄道を始めとするこうした国の事業がますます多くなる。それに伴い、大仕事を差配する請負稼業かぎようもさらに大きくなるであろうことは想像かたに難くない。

弥市はさりげなく座敷を見回した。ちらほら歳若い者が混じっているが、ほとんどが弥市と変わらぬ歳か、少し若いからだ。いずれにしろ身に備わった年季を感じる者ばかりだ。

羽織袴はおりはかまを着け、帯刀たいとうしている者が三人、上座についた。政府の役人だろう。井上の姿がない。弥市はがっかりした。が、すぐに過日

会ったときに見せた残念そうな顔が浮かんだ。井上は鉱山正を務めており、鉄道には直接かわられないのだ。それを歯噛みするほど、悔しがっていた。

「伊藤さんも大隈さんも、あれほど意地が悪いとは思いませんでしたよ。僕が何のために英吉利国で様々な学問を修めてきたか。我が国に鉄道を敷く、その一念であったというのに」

酒をあまりながら、嘆いていた。水を飲むように酒を流し込む井上にはらはらしながら、「そのうちお役が回ってきますよ」と、弥市は懸命に慰めた。眼の据わった井上が、

「当然だ。この国に僕ほど鉄道に詳しい者はいやしないのだ」

と、叫んだために、店の女将が何事かと血相を変えて飛んで来た。井上が大きな身体を縮こませ、平謝りした姿を思い出し、弥市がふと笑みをこぼすと、

「なんだい、薄気味悪いね」

久治郎が顔を向けてきたので、慌てて口許を引き締めた。

「さて皆の衆、本日は、顔合わせの宴席だが、鉄道掛総理の上野景範さま、副総理の平井義十郎さま、そして、測量助手の武者満歌さまにもおいでいただいた」

政次郎がいつぞやとはまったく違って、朗々とした声を上げた。皆が一斉に頭を下げる。

短く挨拶の言葉を述べた上野の後を受けて、その隣にいた細面ほそおもてで顎あごの尖とがった若い男が口を開いた。

「鉄道掛の武者満歌と申します。去る三月二十五日、土木技師のジョン・ダイアックを中心として、汐留に零哩ゼロマイル標識が打ち込まれました。それを起点として、測量が開始され、現在、芝品川において海中での測量が続けられております」

久治郎が、ほうと声を出した。

「あの折は遠目で顔はわからなかったが、芝の海で異人と一緒にいたお方おなたのようだね。袴はかまがぐしよ濡ぬれで、尻餅しりもちまでついていたが」

弥市やいちも頷うなずいた。

「砂に足を取られるだろうからなあ」

我々も羽織を着けるのが礼儀だが、かつての武士たちも、足許は草鞋履わらじばきであっても、普請場の監察に訪れる際には、羽織袴に帯刀、陣笠じんがさといういでたちをしていた。仕事に対する使命感や立場を表すにはまことに都合がいい。

とはいえ、せっかく明治の世になったのだから、そんなしきたりや慣習にこだわることはないと思うのだが、と弥市は苦笑した。

ともにいた洋装の異国人は、足許に何やら丈たけのある履物はきものを着け、動きやすそうに見えたのが、余計にそう思わせる。

武者が懐ふとこから、巻紙まきがみを取り出し、

「では、今後の予定を申し上げます。本日、参集した請負人、職工の方々はよくよく頭に入れていただきたい」

皆の顔を確かめるように見回すと、読み上げた。

測量は、すでに横浜でも始められており、普請は測量終了後、六月より神奈川の築堤、芝品川の築堤は、高輪大木戸を境に二分して、南の高輪側を十月、北の田町側を翌明治四年（一八七二）六月から着手。

汐留から横浜までの間には二十二橋が架けられ、中でも難工事となる六郷川の架橋は十月から開始。

海上築堤、陸地の路盤が完成後に、線路を敷設。

駅舎は、汐留、品川、川崎、鶴見、神奈川、横浜の六つ。汐留は、客の乗降だけでなく、石炭庫、機関車庫、貨車用回転台、外国人用官舎などの施設を設け、鉄道開業は多少の遅れを考慮しても再来年、明治五年（一八七二）秋を目指す。

座敷内がざわめいた。

「二年しかねえということか」

「それだけあれば十分だろうさ」

不安を洩らす者もあれば、樂觀している者もある。けれど、鉄道などというものを眼にしたことがない。線路を敷くのは誰もが初めてだ。その戸惑いと期待とが座敷の中で交錯しているようだ。

武者はさらに続けた。

「敷設にあたり、築堤、六郷川の架橋は、かなり難航することが予想されます。まず、六郷川の架橋ですが、この川には橋が架かっておらず、渡船わたしぶねが用いられていることはご承知でありましょう。水害が多くある難所で、徳川の頃は架橋を断念しておりました。が、鉄道を通すためには、諦めるわけにはいきません。異国の技法を取り入れた橋になるでしょう。まだ概算ではありますが、橋梁きょうりょうは三百四十間けん（約六百十八メートル）を超えるものになるかと思われれます」
ざわり、と皆に緊張が走る。

「これはたまげた。六郷川は川幅が広いとは思っていたが。そんなになるのかい」

思わず声をあげたのは老齢の者だ。確か材木屋の三川屋だ。

「大川で一番長え橋は、永代橋えいたいばしだが、あれが百十間（約二百メートル）くれえのものだから——三倍ということか」

皆がざわつくのを、

「おたおたするねえ、みっともねえ」

政次郎の声が飛ぶ。

「ごほん、と咳払いせきばらいして、武者が再び口を開く。

「ということ、六郷川は、外国人技師の下もとでの架橋となります」

「異人と仕事！」

「言葉がわかんねえ」

「いちいち文句を挟むんじゃねえ。すいやせん、武者さま」

政次郎は軽く頭を下げると、鋭い眼をして、皆を見回した。

弥市は武者の次の言葉を待っていた。きつと築堤のことをいうに違いない。

「それから、海上の築堤ですが」

そらきた、と弥市は思わず知らず身を乗り出して、武者を見据えた。

「これもまた大工事となると予想出来ます。芝から品川の築堤はおよそ二十四町（約二千六百七メートル）というところでしょう。それよりも少し長くなるかと思われませんが」

二十四町。

芝品川あたりの東海道は、弥市にとっては庭も同然。およその見当はついていていた。しかし、こうして数字にして表されると、やはり圧倒される。

久治郎が、弥市をとんと肘で突いてきた。互いに顔を見合わせる。目元を細めた久治郎が頷きかけてきた。申し分のない大仕事だ、そういいたげだった。

「横浜の築堤は、まだ海中での測量を終えていないのでわかりませんが、東京よりはかなり短いものであるうと思います」

武者はそこで一息吐くと、座敷をぐるりと見渡し、すつくと立ち上がった。

「まずこれが、とんでもない大工事であることを頭に叩き込んでいただきたい」

打って変わって、強い口調になった。

「そして、鉄道というものを大多数の者が知らぬまま造り上げるという前代未聞、無謀極まりない工事であることも頭に留めておくこと。いまだ我が国が経験したことのない普請であるのは明白。正直、我ら政府も手探りだ。しかし、本日ここに集った者たちはこれまで様々な難工事をやり遂げてきた自負を持っていると思う。その力を我らに貸してくれ。我が国のため、民のため、未来のための大事業であることを皆々心に刻み、粉骨碎身、本邦初の鉄道敷設に勤しんでもらいたい。これは、ひとりが成し遂げるものではない。皆の力が合わさって成し得るものだ」

武者が拳を振り上げた。

「おう！」

鯨波が上がった。弥市も久治郎も思わず声を発していた。

と、政次郎がすつと背筋を伸ばし、声を張った。

「我ら一同、心して努めさせていただきます」

皆が一斉に頭を下げた。

「上野総理、お近づきにひとつ」

政次郎が銚子ちようしを掲さげて進み出た。副総理と武者には、養子の重太郎が酒を注つぐ、それを機に、賑やかな宴うたげとなった。

酒が進み、座はますます盛り上がる。もうすっかり酔いが回って踊り出し、拍手喝采を浴びる者がいるかと思えば、なにやら深刻そうに顔を突き合わせて話をしている者もいる。ただ、皆、ともかくやかましい。声が大きいのだ。普請場は様々な音や声が飛び交かっている。指図をするにも、なにをするにも、相手に聞こえなければ意味がない。次第に大声が身についてしまうのは仕方がないことだ。

「棟梁。こつちへ来て一緒に呑のみましょうや」

深川の大工や左官が、次々にやってきては声を掛けてくる。

久治郎は顔も広いのだろうが、皆に好かれているようだ。

一旦いったん、付き合いで席を離れたが、すぐに戻ってきて、

「まったく、酒が入ると、皆調子に乗るから疲れちまう」

やれやれとばかりに溜息ためいきを吐いた。

鉄道掛の武者は自ら皆の席を回って、酒を呑んでいる。

「若いお方つかのようだが、なかなかだねえ。皆の心を攪かんじまったよ

うだ。さっきの言葉にもぞくぞくした」

久治郎は感心していた。武者の歳はおそらく二十歳をわずかに出たばかりであろう。こうした若い力が明治にはある。勢いがあると弥市は感じた。

江戸の頃、武家には立身出世の道はなく、ただただいたたく禄を守り、家を守り、ある種の閉塞感を覚えながら安穩な生活を続けていた。町人として同じようなものだ。金のある者は遊興し、貧乏人は食うや食わずのその日暮らし——。不平や不満はあっても、なんとか生きていられる。

泰平の世がなによりではあるし、文句をつける気もさらさらないが、熱情や覇気が失われていたような気がしなくなかった。きりきりと身の内が痛むほどの衝動がなくなっていたようにも思える。だからといってご一新が正しいか、と問われたら即座に首を縦には振れない。しかし、新しい時代、新しい日本を造るという意気込みが、武者からも井上からもひしひしと感じられた。

腐った土台の上に新たなものを建てても、一見、見栄えはいいが、やがては崩れる。この明治という世は、古い体制を一旦更地にして、新たなものを築き上げようとしている。

これは、土工のおれたちの仕事と同じだ。今はその地盤を固めようとしているときなのだ。

国造りは、土工だ。

もともと鉄道敷設に携われることが、嬉しくてならなかった。これは金儲けじゃない、国造りだ。だが、何を造ろうが、かかわろうが、おれたち土工の名が残るわけではない。

それでいい。ここにいる者の胸に、いや、これから従事する何千、何万の者たち一人一人が、自分だけの誉れを感じていれば、十分だ。

弥市は、盃さかずきをあおった。ああ、いい酒だ。

久治郎が「おい、弥市さん」と慌てた声を出した。

眼を向けると、銚子が差し出されていた。膳を挟んで、武者がいた。

「これは、ご無礼いたしました」

武者はだいぶ呑んだのか、眼の周りを赤くしている。

「政次郎さんから伺いました。平野屋弥市ひのしやさんと安達屋久治郎さんが築堤を造るのだと。それで、ご挨拶をと思ひまして」

「とんでもねえことでございますよ。こちらからお席に伺わなきやならねえのに」

「いえ、僕らはあれこれいうだけで、実際に造るのは平野屋さん、安達屋さんだ。よろしく願ひします」

弥市は恐縮しながら盃を差し出す。

そういえば、井上から鉄道掛のことを聞かされたことがある。モ

レルという鉄道技師が作った算術の問題を解き、正式に鉄道掛を拝命するのだという。井上が語ったところによれば、加減乗除はむろん、分数や三角形の問いもあったという。かなり難問だったというが、「ああ、僕も受けたかった。鉄道掛になれたのに」と井上は嘆いていた。

それにはさすがに呆れた。井上さんは上に立つ人間だ、と弥市がいうと、

「たとえ、高いお役を拝命したとしても、僕は座ってなどいられない。普請場に出て行く性質なのだよ」

そういつて笑った。井上と幾度か会ううちに、それが、あながち嘘でないと感じていた。そんなお偉い役人がいたら面白かろうと、弥市は大笑いしたが、難しい問題を解いて、鉄道掛になったこの武者という青年も、きつと鐵路が敷かれた日本の姿を思い描き、このお役目を望んだのであろうと思った。それが、あの力強い言葉となつて表れたのだ。

「にしても、やはりお歳を召した方が多いのには驚きましたよ。どうです？ さすがに二十四町には臆しましたかね？」

武者が悪戯つぼく笑う。

と、久治郎がぐつと武者を睨め付け、膝を乗り出した。

「いえ、逆ですよ。途方もない堤を築くのだと、あらためて気持ち

がしゃんといたしました。海上に堤を築くのが大変なのは重々承知の上で請け負いましたのでね。まあ、私もただ歳を食ってきたばかりじゃありません。ご一新前の台場を知っておりますから」

「そうか！ 品川の台場か、あれはたしか、嘉永七年（一八五四）に三つ造られました。僕は、数えの八つだった」

三人は思わず顔を見合わせた。とすれば、武者は思った通り二十三か。

「やはり、築堤は台場と同じ造り方になるんでしょうね？」

興味津々に訊ねてくる。弥市は少々気圧されながらも、口を開いた。

「品川も神奈川も遠浅の海でしたが、まず土砂を浚ってから、土台を造るでしょう。板を組んだ十露盤を敷き、杭を打ち、細かな石を敷き詰めて——ただ、土によつては別の方法を用いることもありましょう」

「なるほど。土が違うかもしれないのか」

武者はうんうんと頷く。

「しかし、遠浅とはいえ、測量の時には難儀しました。干潮を狙つたものの、もたもたしていると潮が満ちてくる。下が砂では測量器も置けなくてね」

「そうです。干潮時に測ってやらねえといけないので、夜仕事にな

ることもあります。あとは天候ですよ。晴天が続くばかりではないのでね」

「それはわかる」

「そうでした、私は武者さまが芝の海で測量をなさっているとこ
ろを拝見いたしました。しかし、異人というのはあのよう怒鳴る
ものかと、なにやら日本人を馬鹿にしているようで腹が立ちました
よ」

久治郎はあの光景を思い出したのか、尖った物言いをした。

「たしかにね。ただ、技師のダイアックさんは丁寧ていねいに教えてくれる
のだが、その弟子のような奴がうるさかった。ついた通訳がまた酷ひど
くてね。日本人のだが、英国暮らしが長かったせいかな、日本語が
怪あやしくて、僕に正確に伝わらないから、苛立いらだつてもいたんだろうが」
「海で尻餅しりもちをついていたのは、武者さままで？」

久治郎が笑みを浮かべていうと、武者がむつとして唇くちびるを曲げた。

「あれは通訳です。断じて僕ではない」

「しかし、あのいでたちでは動きにくくはありませんか？ なにも
お武家の格好かっこうでなくとも。明治の世ならもう洋装でもいいのではな
かろうかと」

「お、わかってくれるか。そうなんだ。お役目であるから、ちゃん
と支度をしろというのだが、海水を含むと衣裳は重くなり、正直、

刀など邪魔でしかない。それでな、上申しだが」

武者は急に声を落とした。

「副総理の頭が固くて辟易した。が、ようやく総理の上野さまが認めてくださった。でも、測量技師の異国人が履いている長靴というのは用意が出来ないといわれて、がっかりした」

武者は眉尻を下げ、まるで欲しかった玩具を買ってもらえなかった童のような顔をした。

「ただ上野さまを説得してくれたのは、鉾山正の井上というお方だったんだ。ここだけの話、とても面白い人だ。心根が熱く、ともかく猪突猛進、思ったら一直線の方だと聞いた。鉄道がお好きなのか、なぜか始終鉄道掛に入り浸っているのだ」

弥市は武者に気づかれぬよう顔を伏せて笑った。

まったく井上さんらしい。

「ま、かつて英吉利国に伊藤さまと密航したと聞いた時には、ああ僕ももう少し早く生まれておれば、と悔しく思いました。僕は、旧幕臣でね、実は海軍にいたんですよ。しかし、兵部省も肝つ玉が小さい！海軍の敷地だから、陸軍の建物があるからと測量をさせてくれないのですからね。鉄道敷設に反対していたらしいですが、こんな形で意趣返しかと呆れて物が言えません。海軍にいたのが恥ずかしい」

「武者さま、それ以上は」

弥市が止めると、武者は弥市をじろりと見据えたが、いきなり破顔した。

「僕はね、お雇い外国人から進んだ技術を学んで、日本中を測って回りたい。横浜の測量が終われば、すぐに上方かみがたの測量を始めます。顔を突き合わせて、会議をするのは性に合いませんのでね。技術を学んでも、実地で使えなければ意味がない。僕が測ったものをもとに、形にしてくれる平野屋さんや安達屋さんに呆れられないように、頑張りますよ」

武者は上機嫌じょうきげんで、手酌てじやくでぐいぐい酒を呑んだ。

その後、宴席ひやうしやくは一刻いっく(約二時間)ほどでお開きになり、弥市と久治郎は帰路きりについた。午後の陽ひが朱しゆに染まっている。小網町こあみちやうから舟に乗る。川面かわもが陽を浴び、眩まぶしく照り返す。

高島屋嘉右衛門かえもんはとうとう来なかった。弥市は、久しぶりに会えることを楽しみにしていたし、横浜の築堤を請け負ったなら、どう進めて行くのか、話をしたかった。それとも、もう起工まで二ヶ月余りのため、こちらまで出向ひまいている暇がないのかもしれない。

「なあ、弥市さん。横浜の築堤は六月だが、こつちも十月だ。早いところ、動かなくちゃいけねえな。人夫にんぶの下請けはどうする？ 横

浜と人夫の取り合いになるのも困る。やはり児嶋屋こじまやに任せるの
がいいと思うんだが」

「おれもそれがいいと考えていた」

児嶋屋は、浅草に古くからある人夫の請負だ。口入れ屋のように
大名家の中間ちゆうげんや様々な職業を斡旋あつせんするのではなく、土工に携わる人
夫のみ、しかも黒鍬くろくわと呼ばれる土工技能に卓越した者のみを手配す
る、公儀の御家人ごけにんである「黒鍬之者」とは別だ。そちらは扶持ふちを得
て、江戸城内の普請、作事ほりわり、掘割の掃除などに従事していた役人だ。

請負人になったばかりの頃、黒鍬を世話されて驚いた。いわゆる
出稼ぎの農民や江戸の町人とは働きがまったく違う。もっこ担ぎも、
黒鍬はふたりで四十貫かん（約百五十キログラム）もの土を運んでしま
う。弥市の常雇じょうやていの者たちも引けは取らないといっても、三十貫（約
百十二・五キログラム）がやつとだ。そのうえ、商人から請負人に
なった弥市は土の様子などわからない素人しろうとだった。

山を削りけず、土を掘り出すにしても、土が硬かたいか柔やわらかいか、粘ねば
りがあるかで、掘り進め方も違ってくる。黒鍬は土を握り、土質を
判断する。地中深く掘り下げるときにも、異なる土の層を見なければ
ならない。それこそ、土が崩れて、人夫たちが生き埋めになっ
てしまう。実際そうした事故はいくらでも起きる。

土を読む。

黒鍬たちから学んだことだ。

「品川、神奈川の台場もそうだったが、まず海底の浚渫しゅんせつから始めることになる。それも黒鍬にやらせたい」

そうだな、と久治郎が首肯しゅけんする。浚渫は、堀や海底などにたまつた土砂を取り除く作業だ。

「ところで、築堤の差配はあの政次郎さんの倅せがれだというのが、大丈夫かね」

皆に囲まれ、一際ひととき大きな声で笑っていた政次郎の養子重太郎を思い出す。

「大丈夫ってのはどういう意味だい？」

「そのまんまの意味さ」

久治郎が、口許くちがを歪めた。

「政次郎さんの跡を継ぐ器量がねえともつぱらの評判だ。政次郎は『江戸の相政』と呼ばれて、土佐の山内容堂やまうちようどう侯も一目置いた人物だ。口入れ業でも、政次郎さんの一声がありや、子分が千は動くつていうお人だ。その跡目あとめを引き継ぐのはしんどいだろうけどな」

「まあ、せいぜい足手まといにはならないようにしてもらわなければな」

「なんだいそりや。向こうがもたもたしていやがったら、こつちが怒鳴りつけてやればいいさ」

弥市は、それを聞いて、ふっと噴き出した。

「で、肝心の森田屋さんは首を縦に振ってくれたのかい？」

ああ、やっとな、と弥市は笑みを洩らした。

隠居を決めた森田屋を五日かけて弥市は、かき口説いた。

蒸気車のための線路を海の上に造る工事を請け負った、一緒にやろうと持ちかけたが、倅むこにしてくれと拒んだ。一国の大仕事であれば、ぜひ倅や婿むこにやらせたい、経験を積ませたいと譲らなかつた。「ある程度の身代しんたいを築いたつていうなら、それは偉ええれことだよ。あんたが孫の世話をして安穩に暮らすつてえのも悪かねえ。けどよ、この日の本ひもとに初めて走る蒸気車を通す仕事なんだぜ。血が湧わき立つだろう？」

だが、森田屋は首を横に振り続けた。確かに、蒸気車を走らせる堤を造る仕事には惹ひかれるが、新しい世の中は若い者たちが造るべきだといった。

「おりや、ずっと働いた。新政府の兵隊が江戸に入ってきたときも、踏ん張った。江戸を見捨てて逃げることなんざ出来ねえからよ。おれたちは、ここで仕事をしてきたつて自負があるからな。でもよ、このご一新つてのがちようどいい区切りになつたんじゃねえか。引導を渡されたのと一緒だ。引き際を違たがえた年寄りは惨みじめになるだけ

だしよ」

森田屋はそういつて弥市に背を向けた。

だが、弥市は諦めなかった。

「足手まといは御免だぜ」

重太郎から浴びせられた言葉を思い返した。人を侮るようなあの物言いをそっくりそのまま返してやりたいと、森田屋の沈んだ顔を見ながら思った。

若い奴と力比べをすれば敵うはずもない。体力の衰えも年々感じる。だが、おれたちにはこれまで蓄え、身につけてきた技量がある。実地の経験もある。

「あのよ、おめえさんが息子さんや婿殿を慮る気持ちも、大仕事をさせたいという親心もわかる」

「なら、奴らに仕事をやらせてくれよ。弥市さんに預ける」

「冗談じゃない。おれはおれの仕事で精一杯だよ。あんたが、鍛えればいいじゃないか」

森田屋は口元を歪ませ、鬢を搔く。

弥市は身を乗り出した。

「藤助さんよ、あんたはご一新がいい区切りだといった。でもよ、時つてのは、区切りなんざありやしねえ。繋がり、途切れることななく流れているんだぜ。あんたが、請負人として、培ってきたもんは、

あんただけのものじゃねえんだよ。途切れさせちゃいけねえんだ。
繋いで行かないやらねえ」

森田屋の顔を覗き込みながら、弥市はさらに続ける。

「おれたちは、火事や大水や嵐で壊れた江戸の町を壊れる度に建て直してきたろう？　けどよ、鉄路を敷くつてのは、壊れたものを元に戻すんじゃねえ。なんたって、初めての物なんだ。この国に今までなかったものを造るんだぜ。鉄路は、この日の本中に網の目のように延びていくんだそうだ。これからの未来を拓く、万人のための大仕事なんだよ。その取っ掛かりが東京と横浜だ。おれたちが、その魁さきがけになるんだ」

森田屋は苦虫にがむしを嘔み潰つぶしたような表情で、煙管キセルに刻みを押し込みながら、

「なんで、その話、おれに隠していやがったんだよ」

拗すねたようにいった。そいつは？　と弥市は口籠くちかごもる。

「だからよ、蒸気車の仕事をなんでおれに隠していたのかと訊きいてるんだよ」

「まだ、公おおやけに出来なかったからだ。すまねえ。はっきり決まったら告げるつもりでいたんだよ」

森田屋は、ふうと煙を吐いて、煙管の灰はいを落とした。

「いいさ、いろいろしがらみがあるんだろうからな——おれが培っ

てきたものか。ははは、おれもまだ役に立つかよ」

「当たり前だ。海の上に堤を築くんだぞ。神奈川の台場を思い出し
てくれよ。それが長く延びたもんを造るんだからな」

そうか、台場か、と森田屋がぼそりといった。

「そりゃあ、造ったことがねえ若い奴らには任せられねえな」

「だろう？ 神奈川の台場だつてもう十年だぜ。海の上に物を築い
たおれたちが必要になるとは思わねえかい？」

まるで蝶ちようが羽を広げたような形をした台場。勝かつとともに、神奈川
宿じゆくの料理茶屋から眺めた。勝は「こうもり」といつていたが、弥市
には揚羽蝶あげはちように見えた。

横浜は、鎖国さこくを続けてきた日本が世界へ向けて門戸もんこを開いた場所
だ。羽を羽ばたかせ空を飛ぶ蝶と日本の姿を重ねたかったのかもし
れない。

「おれたちは、これまで十分儲けさせてもらってきたし、家族にも
尽くしてきた——まあ、女房子にようぼうどもが満足しているかは訊いたこと
はねえがよ。けど、この先は、若い奴らや世のために、恩返ししやれと洒落
込もうじゃねえか」

「恩返しとはまた、大袈裟おおげさだ」

森田屋が顔をくしゃくしゃにして笑った。

「また、爪つめの中が土まみれか、やれやれ」

「ははは、ちげ違えねえ。それが、おれたちのなりわい生業だ。一緒にやろうぜ、藤助さん」

弥市は森田屋の手を取った。森田屋は強く頷くと、手を重ね、力強く握り返してきた。

その森田屋は、早速、まなづるむら真鶴村へと旅立った。石の切り出しを請け負ってもらうためだ。

ふと、弥市が眼を移すと蝶が飛んでいた。

黒い羽が落ちかかる陽光を浴びて、青く見えた。からす烏揚羽だ。まだ時季が浅い。気の早い奴もいたものだ。

そういえば、勝の屋敷を初めて訪れたときにも揚羽が飛んでいた。どうにも、揚羽を見ると、でかい物を造るのかもしれない。おれにとつてはうちは吉祥かもしれない。

弥市は眼を細め、川の上を渡る蝶を眺めた。

三

顔合わせの宴席の三日後、弥市は動き出した。久治郎をうだ宇田川町の自宅に呼んだ。

お蝶が淹れた茶を飲みながら、久治郎がいった。

「きれいな娘さんだね。まだ嫁には出さないのかい？」

いや、と弥市は口籠もった。

久治郎が弥市の様子を見て、ふっと笑った。

「弥市さんも正直なお人だね。娘じゃなければ、下働きの者としてもいえばいいものを。面倒見てるんだらう？」

「まあ、そんなところだ」

弥市はごまかすように茶を飲んだ。

昨夜、久しぶりにお蝶の元を訪れた。お蝶の白い肌はだに触れると、まだまだ自分は男なのだとと妙な自信を取り戻す。

なんとも物悲しく思うのだが、お蝶が自分に応こたえてくれるのが、嬉しいのだ。とはいえ、お蝶をこのままここに留とどめておくのもかわいそうだと思うようにもなっている。宴席の帰りに烏揚羽を見たせいかかもしれない。

蝶の命は長くない。お蝶にも良い相手を見つけてやりたいが、まだ手許に置いておきたいという勝手な気持ちも湧き上がる。

「それで、土は八ツ山やつやまと御殿山ごてんやまからでいいのだね」

「そうだね、おれたちが切り割りした土をそのまま使うことが出来ると肥後ひごさまは仰おしやっている。それから、昨日、肥後ひごさまが家に来てね、工事の割付役は、旧幕府お作事方の大竹宗保むねやすという方に一任されたらしい」

「そうか。作事方ならば間違いないな」

「児嶋屋は、黒鍬を五百、とりあえず集めてくれることになった。

あと、半之助さんのところの梅田組が、作事方の使っていた肝煎きもしりを仲介してくれたらしい。半之助さんからは、何か知らせがあったか
い？」

「いや、なにもないな」

「そうか。だが、うちと弥市さんと、梅田組とで人夫を集めればなんとかなるな」

弥市は算盤そろばんを弾く。ひとりが一日で掘る土の量、運搬する量。

「一日、二千か。飯炊めしたきもかなりの数が必要だ」

「土置き場、それから小屋も用意しなければな。小屋は大工のおれに任せてくれ」

「それは頼もしい」

「結局、二十四町の築堤には、どのくらいの人夫がいるのだろうか。さすがに、そこまででかい物をおれは造ったことがないから、まるで見当がつかない」

「ああ、それなら神奈川台場の際には、やはり一日に二千人ほどだったな」

久治郎は、腕を組んだ。

「森田屋さんはいつ戻るんだ」

「今日には戻ると文かみがあつた。真鶴村では快こころよく引き受けてくれた
そうだが」

「それはよかつた」

「藤助さんが帰つたら、すぐに見積もりを出さないと。まあ、此度の工事は材料の金が出る。だが、見積もりによつては、弾かれるかもしれない。高島屋の嘉右衛門がどこに依頼しているかということもある。見積もりに差があると困るからな」

やはり、嘉右衛門に会いに行かねばならない、と弥市は思った。ただ、絵図面がどうなっているのか、弥市は気になっていた。品川も神奈川も絵図面が引かれている。それを見て、見積もりを出し、人夫の数を決め、資材がどれだけ必要か算出しなければならぬ。海の上に築くのであるから、どういう形にするのか、土台はどのように造るのか。

早く、絵図面が見たい。

と、お蝶が声を掛けてきた。

「鉦山正の井上勝まさむねさまからのお使いです」

弥市は眼をしばたたく。

すぐさま、お蝶から渡された文を開いた。

「久治郎さん、明日、民部省の鉄道掛に来てくれとある」

翌日、民部省の鉄道掛を訪れた。鉄道掛を置く民部省は、築地の浜御殿に築地川を挟んで隣接している旧尾張徳川家蔵屋敷を使用している。

「やはり御三家だねえ。蔵屋敷も豪華なもんだ」

真鶴から戻った森田屋が通された座敷を見回し、開け放たれた障子の先に広がる庭を見つつ、緊張した面持ちでいった。

旧尾張徳川家の蔵屋敷は約三万坪の敷地がある。大名家の蔵屋敷は領内の物産や米などを納めておく場所だ。ご一新後、旧陸奥会津松平家中屋敷などのように汐留の停車場として更地にされることもあるが、多くの大名屋敷、旗本屋敷は、新政府要人の住まいや、このように省庁施設として流用されている。

「そうだねえ。そういえば、新政府のお役人がある旗本屋敷を与えられたそうだが、広すぎて夜は草木の音しかしないと怖がって、すぐに出て行ったって噂があったよ。新政府のお役人には下級のお武家も多いから、そんなお屋敷で暮らしたことがなかったんだろうよってね。これは大きな声じゃいえないけどね」

とんだ笑い話だな、と久治郎が肩を揺らした。

「けど、こういう武家屋敷も次第に壊されて、東京の景色も変わっていくんだろうね。これから通る蒸気車もそのひとつだ」

森田屋がしみじみいいながらも、どこか嬉しそうにしていた。

やはり、此度の仕事を頼んでよかった、と弥市は思った。隠居を決めた時には、言葉は悪いが、しよぼくれていた。けれども今は顔色も驚くほど明るい。

四半刻（約三十分）も待たされただろうか、

「すまなかつたね」

井上が座敷に入ってきた。

三人は、頭を下げる。

「いいよ、楽にしてくれ。先日、請負人らの宴席があったと聞いた。

僕も行きたかったのだが、上野総理に止められたんだよ。酷い話だ。

井上さんは鉄道掛ではないと、はっきりいわれた」

「それは、お気の毒で」

弥市が軽口を叩くと、

「まったくだよ。融通が利かないのには困ったものだ。僕が酒好きだということも忘れている」

拗ねたようにいった。

森田屋が怪訝な顔で、弥市の耳元で囁いた。

「このお人が井上さまなのかい？」

弥市は大きく頷いた。

「僕は鉱山正の井上勝と申します。この度は、鉄道敷設にあたり、骨折りをしてくれることありがたく。礼をいう」

井上は居住まいを正し、慇懃^{いんぎん}に頭を下げる。

「およしくください。私たちはこの大仕事にかかわれることを心の底から誉れに思っているのですから」

久治郎が膝を進めていった。

「いや、ありがたいよ。そうそう、僕もいよいよ鉄道にかかわれる」

「それは、おめでとうございます」

弥市は思わず声を上げた。

「実は、鉄道技師のモレルさんがね、鉄道敷設を機会に、独立した省を立てたらどうかと提案したのだよ。工部省^{こうぶしょう}という名称でね、鉄道、鉱山、土木、造船、電信、測量など、官営の事業を扱う役所だ」

ああ、なるほどと三人は頷いたものの、嬉しさで興奮しているのか、早口でよくわからない。ともかく、鉄道はその工部省で営^{いとな}まれることだけはわかった。

測量もあるのだとすれば、武者はどうするのだろう。日本中を測りたいと語っていたが。

「では、井上さまは、鉄道のお偉い人になるんでしょうね」

弥市が勢い込んでいうと、

「それはわからないが、どんな役に就^ついても、僕は机の前に座っているのはまっぴら御免だよ。外に出て、モレルさんから学んだものを生かしていかなければね。日本人が日本人の力だけで鉄道を敷く

ことが出来るようになるためには、部屋に閉じこもっていてもダメだからね。僕にはその責務がある」

弥市は、つい笑みをこぼした。先日の武者も同じようなことをいつていた。

「なんだい？ 何かおかしいことをいったかな」

井上が訝しむ。

「いえね、過日の宴席で、武者満歌さまという鉄道掛のお方もそう仰っていたので」

「へえ、あいつか。あいつも熱心な男だよ。嬉々として、海に入つて測量をしている。元いた海軍の悪口をいながらね」

そう、その海のこと、今日、来てもらったのだ、と井上が急に真顔になる。

聞けば、芝高輪あたりの漁師、魚屋からの鉄道敷設反対の声をますます大きくなり、これをどう収めればよいか、知恵を貸してくれという。

「このまま、沿岸の町人たちの声を無視すれば、工事が始まってからどのような事態が起きるかわからない。それこそ、せっかく土を積み上げて崩されるかもしれぬし、人夫たちとのいざこざもあるかもしれない」

「それは危のうごぎいますよ。人夫たちの中には、荒くれ者で喧嘩

「つ早い者がおります。下手に手を出せば、刃傷騒ぎも起きかねない」
久治郎が身を乗り出した。

「ええ、安達屋さんのいう通りです。かつて、私の普請場でも、土が通りを汚したと苦情をいつてきた住人に人夫が大怪我を負わせてしまったことがあります。住人のほうから手エ出してきたんですが、殺めないだけよかったですとは思いました」

森田屋がいうと、井上が腕を組み、唸った。

「そうだな、人夫たちは力仕事だ。昼も夜も働く体力がある、腕っ節も強い。気の荒い者も多いだろう。そんな者たちを相手にしたら、いくら威勢のいい魚屋でも、あつという間に叩き伏せられるな」

「仰る通りです。そういう者たちだからこそ、しっかりした土台が造れるのでございますがね。私たちは、人夫たちとの信頼関係を築くのがまず第一」

弥市がいうと、

「築堤を造り始めてから説得するのでは遅すぎるような気がしてならんのだ。まず鉄道をよく知ってもらわねばならんと思うのだが、僕ひとりが出向いていっても——果たして住人らが耳を傾けてくれるかどうか」

と、ちらと弥市を窺った。

「まあ、そうでしょうね、井上さまはお役人ですから、余計反発さ

れるかもしれません」

皆が腕を組んで考え込む。

「僕としては、酒でも呑みながら、皆の心を解ほぐして話が出来ればと」
森田屋が急に感極まった表情をした。

「なんてお役人さまだ。お偉い人はもつと尊大かと思っております。住人のことなど構わず鉄路を敷くものかと思っておりますのに」

ん？ と井上がきよんとした顔をした。

「いやいや、このまま強行しても構わんのだよ。でも、僕はね、皆に鉄道を好きになってももらいたい、素晴らしいものなのだということを知ってもらいたい、その一心なのだよ。蒸気車が嫌きらわれるのが、忍びないのさ」

はあ、と森田屋は頓狂とんきやうな声を出したが、すぐに腹かかを抱えて笑い出した。それにつられて、弥市も久治郎も声を出して笑う。

「井上さまは、まことに蒸気車がお好きなんですわね。わかりました。私たちも同道いたしましょう。高輪あたりは私も顔馴染みが多いですから」

「おお、そういつてくれるのを待っていた」

井上が少年のように嬉しそうな顔をした。

漁師か。弥市は、まだ見ぬ築堤の姿を思い浮かべた。それと同時

に、築堤の向こうで漁をする舟も――。

築堤の高さがどのくらいであるのか、まだわからない。

が、不意にある光景が見えた。

線路の下を舟が通る。隧道だ！ 隧道を造ってはどうかだろうか。

それならば、舟が浜と沖を行き来することが出来る。

ただし、その部分をどうすればよいのかまでは想像がつかない。

井上に告げてみるか。一蹴いっしょくされるか、一笑いっしょうに付されるか。

「井上さま」

弥市は、井上の眼を真まっ直すぐに見た。

「ただの思いつきではございますが、築堤に隧道を造るといのは
いかがでしょうか？」

久治郎と森田屋が、仰のけ反ぞった。

「弥市さん、築堤には蒸気車が通るのだよ。強固な堤を築くのに、
隧道など設けたらどうなると思う？」

久治郎が血相を変えて声を荒らげた。

「だから思いつきだといったじゃないか」

井上は黙っていた。

やはり、馬鹿な考えだったのだ、呆れているに違いない。

「平野屋さん」

井上のあらたまった物言いに弥市は身を硬くした。

「隧道とはまた思い切ったことを考えたものだねえ」

「いや、ですから、今ちよいと思っちゃいます。蒸気車が通る線路の下を舟が通る光景というか風景というか」

井上は息を吐き、顔を伏せた。

「申し訳ございません。いい歳してつまんねえこといつちまって」

弥市がいうと、井上の肩が小刻みに震え出した。

これは、と弥市はふたりに助けを求めるように顔を向けた。

井上の口から、くつくつと妙な声が洩れた。「面白い」と呟いた。

「あははは、これはいい」

井上は顔を上げると、勢いよく手を叩いた。

「平野屋！ それだ！ 線路の下に舟を通せばよいのだ。ただ、呑

んで、懐柔かいじゆうしようなどという僕が甘かった。こちらからちゃんと

土産みやげを持っていかんと、納得なっとくしてもらえまい」

「でも、そんなことが出来るのでしょうか」

弥市は思いつきに喜ぶ井上の姿を見て、かえって不安になる。

「よし、モレルさんに訊いてみよう。そうしよう！」

井上はいきなり立ち上がると、座敷をあつという間に出て行った。

ふわりと風が巻き起こる。

残された三人は呆気あっけにとられ、しばらくぼんやりとしていた。

（つづく）